

連載企画—音の博物館—

連載企画「音の博物館」を終えるにあたって*

荒井 隆行 (音響教育調査研究委員会/上智大学)**

約4年間に渡り、「音の博物館」の連載を続けてきたが、ここでひとまず区切りをつけることになった。連載は第62巻12号から隔月で始まり、学会員のみならずあらゆる方々が読めるようにと学会ウェブページ上[1]でも公開した。

本連載では、音響教育調査研究委員会の委員が自ら取材をしたものだけでなく、外部の方々に執筆をお願いすることも多々あった。博物館・科学館そのものを紹介するほか、あるアイテムに着目した記事も揃え、多面的に様々なテーマを取り上げるように努めたつもりである。ただ、限られた条件の中での取材をもとにしているため、まだまだ取り上げたかった内容や私たちの知らない情報もあるに違いない。いたらなかった点についてはご容赦いただきたい。

理科離れが叫ばれ、学校教育の場でも音に関する単元が減少している中、科学への興味・関心を芽生えさせる科学博物館の役割は大きい。音響教育調査研究委員会としては、音の専門家の立場から展示や体験学習の企画立案に参画したいとの思いがあったが[2]、2006年より国立科学博物館において「音の科学教室」という体験学習を開催し、2007年からは夏休みのイベント「サイエンススクエア」へブースを出展するに至っている。更に、ソニー・エクスプローラサイエンスにおける企画展「What's Voice? 一声ってなあに?」や、日立シビックセンター科学館における「声道模型」の展示監修を荒井がさせていただくなど、科学館・博物館の連携が少しでも強まったことを実感している。また、先日は、総合的な学習の時間にスピーカをテーマに調べている中学生から先生を通じて学会へ質問が届き、回答するという一幕もあった

(回答については委員会ホームページ[3]でご覧いただけます)。このように、アウトリーチ活動の幅が広がっていることは、音響教育の観点からも非常に喜ばしいことである。音に関する様々な情報を発信していくことで、学会の大きな使命の一つである社会貢献の一端を担うことができている幸いである。

振り返ると、2005年より音響教育調査研究委員会の委員長を仰せつかり、本連載はそれと時期を同じくして企画された。これまでの間に、委員会では、ホームページの開設、高等学校の物理の教員によるサークルの取材、音響教育に関する解説記事や小特集を執筆・編集、日本の大学等におけるシラバス調査、博物館・科学館との連携、日米音響学会ジョイント会議にて音響教育セッションのオーガナイズ、音響教育研究会の開催、研究発表会での音響教育セッションの常設化など、様々な活動を行ってきた。編集委員会とも相互に連携してサマーセミナー・ビギナーズセミナーの講演者に小特集(66巻9号)の記事をご執筆いただいたり、逆に、過去に会誌にて「やさしい解説」をご執筆下さった方々に研究発表会の音響教育スペシャルセッション(2010年秋季)にてご講演いただいたりもした。

今後、また機会があれば、第2弾の「音の博物館」の企画があってもよいとの声もある。始まったばかりの博物館との連携を大切に、例えば前述の国立科学博物館での活動なども皆様方のご協力で分野を広げ、より一層充実させていければ幸いである。なお、次回(67巻2号)からは新しい連載「音響学の温故知新」が始まる。

文 献

- [1] 「音の博物館」のホームページ：<http://www.asj.gr.jp/journal/museum.html>.
 [2] 吉久光一, “連載企画「音の博物館」を始めるにあたって,” 音響学会誌, 62, 899–900 (2006).
 [3] 音響教育調査研究委員会ホームページ：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/asj/edu/>.

* Summary on the series of “Exhibits and demonstrations on acoustics in science museums.”

** Takayuki Arai (Technical Committee on Education in Acoustics/Sophia University, Tokyo, 102–8554)